
葵を名乗る者 ～秘伝葵流～

モーディス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葵を名乗る者　　秘伝葵流　

【Nコード】

N9090X

【作者名】

モーデイス

【あらすじ】

古武道・葵流を修めし、葵3兄弟。

影ながら技を継いだきた彼らが、武人の街・川神市に訪れた目的とは……？

（前書き）

時期尚早ですが、つつい書いてしまいました。

Sの二次を書くとすれば、こんな感じになるという予定です。

気分転換も兼ねていますので、こんなもんとって流し読みしてくださると助かります。

かつて、九鬼^{くかみ}を名乗った者たちがいた。

葵紋の当主にのみ術を教え、扶持を食んできた一族がいた。

無論、1つの家の当主にしか技を教えぬ故、その正体は不明瞭。
ある家臣がいうには、まるで忍びのような技を使うとのことであり。
また、当主の乳母が目にした折には、兵法を教えていたという。
鬘を結って城勤めをしていたので、士族ではあつたのだろうが。
分かるのは、そのことと、彼らが『九鬼^{くかみ}』を名乗っていたことのみ
である。

しかし、大政奉還が成され、身分制度が消失したことにより。

彼ら九鬼の一族は、野に放たれ。

その折に、当主に許しを得て、彼らは名を変えた。

葵の紋を持つ者にのみ、技を教え伝える。

すなわち、それは葵の一族であるといつても過言ではない。

よって彼らは、その日から『葵』を名乗るようになり。

彼らの伝えてきた技は『葵流』と呼ばれるようになった。

本題はココからだ。

葵を名乗るようになり、野に放たれたのはいいが。

近代化をうたう世の中は、彼らにとって暮らしにくい世界となっていた。

人を殺す術に需要などなく、学びたいと思う者も僅か。

自分たちの覚えた技術で飯を食っていくには、少々無理があった。

そこで、葵は2つに分かれた。

1つは、今までの性を捨て、普通の人として生きていくことを決意し。

もう1つは、己の技を生かす機会を求め、新天地……アメリカへと旅立った。

そのうち、日本に残った一族の1人が、のちに『葵紋病院』を設立することになる。

日本で葵といえは、有象無象よりは名が知れた一族という位置づけになる。

野に放たれた彼らは、殺傷のノウハウを生かし医術に手を染めた。

当時こそ金創（外科手術）を主としていたが、時代が進むにつれて薬も扱うようになり。

昭和の半ばには『あおい屋』なる薬屋も営んでいたそうだ。

そうして徐々に蓄えた力を使い、川神市に葵紋病院が建つこととなった。

そこからはもう、多くを語ることはないだろう。

今の川神市と葵紋病院を取り巻く人々を見れば、何が起きているかは明白だ。

一方、アメリカに渡った葵たちは、その名をひそめた。

当初こそ日本の葵と連絡を取っていたが、2年もせず文が途絶え。

以来、日本の一族が何度かコンタクトを試みるも、音信不通であった。

無論、文が届かぬとはいえ、それ以外のことをしなかったわけではない。

ときには人を雇い、アメリカに目立った日系人がいないかを探し続けた。

ある者はアメリカまで出向いたそうだが、当然、無駄に終わっている。

日本の葵たちの苦労も虚しく、アメリカの葵は姿を現さなかった。

アメリカに渡った者たちはどうなったのか。

葵の技で、いかようにして生きて来たのか。

あるいは、すでに血を絶やしてしまったというのか。

日本にいた一族には、全く知ることができなかった。

つい、最近までは。

渋川烈火。

合気道の達人である。

より厳密に言うなら、合気道を元にした実践柔術の使い手だ。老いてますます気性は荒くなり、精神性を欠いた武道家として名をはせている。

しかし、その實力は、誰もが認める確かなもの。

川神院の師範代クラスには劣るが、技のキレは一級品。

合気の理を自在に操り、叩きつけ、へし折り、躊躇なく人を壊す。

川神院に属さない武道家としては、文句なしに上位クラスの實力者である。

もちろん、歳相応に弱くなっている部分もあった。

いくら合気の理を得たからとはいえ、老いに勝つことはできない。

動体視力、反射神経、関節の柔らかさ、スタミナ、タフネス。

あらゆる要素が、歳を重ねることに弱く脆くなっていた。

川神鉄心という例外がいるが、つまり、渋川は例外になれなかったのである。

とはいえ、達人は達人。

アルゼンチンの格闘家メッシなどと比べれば、僅かに見劣りするが、名もないようなの武道家連中相手には、容易に引けを取らない。

凡人から達人への境界線に立つ、間違いない實力者。

それが、渋川烈火である。

その実力者が、息を荒くしていた。
みっともなく大口を開き、少しでも多く息を吸おうとしている。
達人・渋川烈火とは思えないほどの、疲労と焦りを顔に浮かべたま
まに。

渋川の右瞼の上は、ザツクリと切れている。
肌に汗を浮かばせ、血を流し、それを混ぜ合わせた液体が頬を流れ
ている。

その液体が目流れこんでしまったのか、右目は閉じたままだった。
ヘタに目を開けば、血の油が眼球に広がって視界を悪くする。
それを経験則で知っているからこそ、渋川は瞳を閉じたままにして
いた。

場所は、どことも知れぬ路頭である。

大きな銀杏の木が1本あるくらいで、他には街灯が2つだけ。
コンビニどころか、自販機の1つさえ見当たらない。

無機質なアスファルトの上に、ちらほらとゴミが転がっている。
川神市にこんな場所があったのかと思わせるほど寂れている場所だ。

明かりは、月の光と街灯のみ。

僅かな光だが、男2人を闇から浮き上がらせるには十分だった。

渋川と向かい合っているのは、1人の男。
黒い上下のトレーナーを着た、体格のいい男だ。

やや広い額を縁取るように、黒い髪の毛が生えている。
その額の下から、小さな瞳で渋川をねめつけていた。

2人の距離は、5mを僅かに切る程度、蹴りも拳も届かぬ間。
まだまだ余裕のある立ち位置で、事態は膠着している。
互いに構えたまま、じっと相手を見据えている。

「デメエ、何モンだ？」

達人は、彼の目線の先にいる男に声をかけた。
何も、答えを期待しているわけではない。

少しでも時間を稼いで、呼吸を整えるために。
そして、わざと己に隙を作り、敵の攻撃を誘うために。
そういう意図を秘めた、意味のない問いであった。

だが、男は動かない。

ダラリと両手を下げたまま、顔を少し前に出して構えている。
この男もこの男で、渋川の先手を誘っている。

ということは、渋川烈火の戦い方を知っているとみてよいだろう。

渋川烈火は、元をたどれば、純粹に合気道の使い手であった。
当身も使えるが、それは、合気の技を極めるためのもの。
それを専門に習い、打撃で人を倒すという発想は、渋川にはない。
つまり、打撃で先手を取るというのは、渋川にとって不利になる。

だから、男は渋川の先手を誘っているのだ。

つい先ほど、渋川はその手に掛った。

というよりも、その手に乗らざるを得なかった。

先ほどから無防備に差し出されている、男の顔。

その顔が、あまりにも打ちごろの高さにあるのだ。

仮に罠であつたとしても、打たざるを得ない場所に据えられている。

もちろん、渋川は耐えた。

1分、2分……5分耐えた。

しかし、その5分の間で、集中力が削られてしまったのだ。

そこで渋川は、相手が手練であり、自分が追い込まれていることを自覚した。

言うまでもないが、渋川は老齡の格闘家である。

強いことは強いが、若い時分に比べれば体力は格段に落ちている。

相手の方が遥かに若いことを考えると、持久戦は望ましくない。

つまり、不利と分かつていても、手を出さざるを得なかったのだ。

渋川が察した通り、それは罠だった。

男は、素早く放たれた拳を避けながら、肩で上に弾き上げて。

渋川が拳を戻すよりも早く、左の肘を繰り出した。

当たれば相手を殺さずにおかない、そういう肘であつた。

しかも、ただ、肘を相手の頭に当てようというのではない。伸び切った渋川の腕を巻き込み、同時に、肘を折らんとする一撃だ。古流のタイミングで放たれる、ムエタイの威力を秘めた肘。男の一撃を形容するのであれば、そういうことになる。

その一撃を、なんとか避けた渋川であったが。打ち下ろし気味に放たれた肘によって、脛の上を切り裂かれ。拳句、腕を巻きこまれたせいで、肘を痛めつけられた。一撃で2つのダメージをもたらす、渋川の知らぬ技であった。

これがもし、ただの肘打ちであつたなら、渋川は踏み込んだらう。右腕を痛めつけられながらも、残った左腕と両足で雪辱を果たす。渋川烈火は、そういうことができる武術家なのだから。実際、渋川はそうするはずであつたのだ。

だが、男が足を引いた。これほどかと思うくらいに潔く、躊躇いなく引いた。ここで追えば、また、不慣れな先手を打たされることとなる。ゆえに、渋川烈火は踏みとどまり、瞳を血で濡らしていた。

そして、今に至る。

渋川のみが怪我をし、渋川のみが息を切らせ。無傷で息の整った男が、渋川を暗い瞳で見据えていた。

戦況は、渋川の圧倒的な不利。

身に受けたダメージ、勝負の流れ。

いずれを以ってしても、渋川の不利は揺らがない。

だというのに、男は渋川をじっと見据えている。

これほどまでに憔悴した渋川を、蛇のように無機質に見据える。相手が弱っているいても、決して油断をしない。

手負いだということを理由にして、渋川烈火を軽く見ない。

恐ろしいほどに冷静で、計算高い男である。

「けつ。名も名乗らねえたあ、武人の風上にも置けねえヤツだ」

渋川の、苦し紛れの時間稼ぎが続く。

年齢のせいもあるだろうが、集中力が戻らない。

そして、相対している強烈な男に、隙が見当たらない。

今の言葉も、そんな中での破れかぶれの一言だった。

だが、その言葉を聞いて。

男が、くふっ、と小さく笑った。

唇の間から、偶然小さく空気が漏れてしまった。

そっという笑いであった。

「よもや、渋川烈火に武人の道を説かれるとはな」

口元を僅かに歪め、男はそう言った。

つまり、渋川のことをよく知っているということだ。

それも、偶然耳にしたとか、少し調べたという次元ではない。

渋川烈火という男のことを、深く知っている風であった。

「なんでえ。オイラも有名になっ」

言葉の途中で、男が間を詰めてきた。

男が、渋川を相手に先手を取ろうとしてきた。

本来であれば、相手から先に攻めてくることは、渋川にとって有利になることだが。

今の渋川は、完全に対応が遅れていた。

安心しきっていたのだ。

一言も発さなかった男が、言葉を返してきた。

会話が成立する……休める時間が確保できたということに、安心したのだ。

その心の隙を突かれたがために、渋川は反撃の機会を失った。

タイミングもそうだが、加えて、間合いを詰める速度が絶妙なのだ。早くもなく遅くもなく、散歩でもするかのような速度で歩を進めてきた。

それより早い、あるいは遅かったなら、渋川は十分に反応できただろう。

しかし、過去に経験したことのない速度は、渋川の判断力を鈍らせた。

渋川が心を決める前に、蹴りの距離を超え。

次いで、拳の間を超え、肘の間合いを超え。

男の顔が眼前に迫ったところで、渋川の股間に激痛が走った。

垂らされていた、男の右手。

「かつ……！」

内臓を潰される激痛が、突然に襲ってくる。

その洪川を、男は担ぎ上げた。

渋川の股に肩を差し込み、ひよい、と持ち上げ。

加減することなく、頭部から銀杏の木に叩きつけた。

武人の末路が、そこにあつた。
血に濡れ、地に打ち捨てられる。
いつかは巡ってくる、武人の最後。

渋川烈火に、ついに、その日が訪れた。

ただそれだけだが、だからこそショッキングな光景だった。

渋川烈火は、達人である。

精神論ばかりを説いて、実力を持ち合わせていない達人ではない。
少なくとも、路上で挑んでくる有象無象程度には負けない。

名誉も何もかも、強さのみに預けてしまった、そういう達人である。

その達人が、路上で打ち果たされる。

十分に過ぎるほど、肝を潰すような光景であつた。

「……この程度か」

そう呟くと、男は、懷から一枚の布を取り出す。

畳んだハンカチ程度の大きさの、小さな布切れ。

それを、渋川烈火の傍らに、ふわりと投げた。

その布には、血のようにドス黒い、三つ葉葵があてがわれていた。

達人、渋川烈火が重傷を負わされる2週間前。
3人の男が、日本の土を踏んだ。

男たちは、いずれも黒い髪に、黒い瞳を携えている。
東洋系……日本人らしい顔つきをしているが、彼らは日本人ではない。

少なくとも、国籍の上ではアメリカ人であり、いわゆる日系である。
この国の血が自分たちに流れてはいるが、この国に踏み入るは初めてだ。

彼らのいる場所は、とりわけ賑やかしい。

というのも、そこが空港であるなら当然の道理ではある。

迎える者、迎えられる者、見送る者、見送られる者。

様々な転機を迎えた人々が、所狭しと詰め込まれているのだから。

そんな中であって、男たちは静かなものだった。

荷物を受け取って早々、人ゴミから離れた場所に陣取る。

疲れた様子こそ見せないが、3人の中で中間の背丈を持つ男のみが
イスに腰かけた。

4人掛けのイスだというのに、大きな男と、僅かに小さな男は立つ

たままでいる。

周囲に無言の圧力を広げながら、彼らは場所を譲ろうとはしなかった。

どうやら、この3人は縁者らしい。

3人の誰の目も、黒目の部分が普通よりやや小さい。

また、程度は違うが、形よく額が広がっており。

3人の誰もが、蛇のような感情を感じさせない瞳をしていた。

しかし、そんなことは些事だ。

並々ならぬ屈強な体こそが、彼らを際立たせている。

小さい男でも180cm近くあり、一番大きい男は190cmを優に超える。

しかも、そのいずれもが鍛え込まれた体であった。

平均的な日本人が多く集まる場所で、目立たないはずがない。

もっとも、スポーツジムなどに顔を出しても、確実に人目を引くに違いない。

「なあ、兄貴。そろそろどこに行くのか教えてくれないか？」

一番小さな男が、彼より少し大きな、イスに腰掛けている男に聞いた。

兄貴、という言葉聞いて、もっとも大きな男も、座っている男に目を向けた。

ということは、恐らく、座っているこの男こそが長兄なのだろう。

「そうだな」

そう呟いて、男……長兄は遠くを見つめた。
否、単に遠くというわけではない。

彼らが住んでいた土地、アメリカに向かって目を向けていた。
住み慣れた土地に執着があるのか、それとも、そこに何かがあるのか。

それとも、思い出に浸るような何かがあったのか。
いずれともとれるような、恍惚とした視線だった。

しかし、そのように蕩けているのは視線だけ。

口元にも、頬にも、表情のどこにも感情はこもっていない。
彼の視線だけが、なにか感情めいたものを放っている。
ただ、それだけのことだ。

兄と呼ばれた男がそうしている間にも、他の2人は動かない。
大きな男も、僅かばかり小さな男も、兄の言葉を待つばかり。
仏頂面をそのままに、むっつりと押し黙っている。

たっぷりと1分後。

周囲の喧騒と相反していた沈黙は、ついに破られた。

「川神市」

武士道プランが提唱され、その本拠地となった川神市。男たちは、どうやらそこに向かおうとしているらしい。そして、男たちの体格と雰囲気を加味すれば、何をしようとしているかが分かる。

川神市とは、武道の達人が集まる土地。

より厳密に言うなら、武道というよりは、武士が集まる土地。人を殺す技・人を倒す技の熟練者が集まる場所。

「むっ」

「おう」

2人の弟は、それぞれ声を上げた。

その声にもやはり、歓喜の色が混じっている。

それも、いたしかたないだろう。

ついこの間、彼らは、長年の呪縛から解放されたのだから。

人を殺す技を身に刷り込みながらも、それを隠して生きる日々。

使うことのない技を、永遠とも思える時間をかけて磨く日々。

そのような日々が終わりを告げ、自由に技を振るえるようになったのだ。

ようやく、人を壊す技を、人に使えるようになる日が来たのだ。歓喜を覚えぬはずがなかった。

「ということとは、兄貴……」

「ああ」

もつとも大きな男が、興奮を抑えきれずに長兄に問うた。

無論、この場に至って問う必要などない。

彼らが葵流である、そして、川神市が武の街である。

その2つだけ分かっていたいれば、自ずと答えが見えてくるのだから。

「葵流を、天下に知らしめる」

長兄、	葵	文吾
あおい	あおい	ぶんご
次男、	葵	密丸
あおい	あおい	みつまる
三男、	葵	飛丸
あおい	あおい	とびまる

葵の血を引く3人が、今、川神市に波乱を巻き起こす。

（後書き）

ううむ、やはりグダグダしましたね。

葵3兄弟を書きたくて仕方なくて、ついつい書いてしまいました。
前書きでも書きましたが、Sで二次を書くなら、このキャラクター
たちを使うことになりそうです。

……あー、我ながら相変わらずですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9090x/>

葵を名乗る者 ~ 秘伝葵流 ~

2011年11月14日06時26分発行